

神経発達症(2): 注意欠如症

2023年10月3日 産業医・労働衛生コンサルタント(京都大学名誉教授) 川村 孝

自閉症と並んで注意欠如症attention deficit disorder(ADD)にもしばしば出会います。この特性の本質は「部分部分は見られるが全体を同時に見ることができない」というものです。「俯瞰不全」とも言えます。その結果、段取りが悪い、気が利かない、締め切り間際にバタバタする、ペーパー試験の成績はいいのに実践ではうまく対処できない・・・といったことが起きます。

巷間「ADHD(注意欠如多動症)」と言われていますが、小児期に多動であっても成人では目立たなくなりますし、全く多動性を示さない人もいます。全体視をすることとじっとしていることは脳の異なる部位の作用のように思われますので、注意欠如症と多動症は分けた方がよいでしょう。

神経発達症における注意の欠如は「うっかり見落とす・忘れる」というケアレスミスではなく、「集中しても気がつけない」、いわば“ケアフルミス”という状態です。「自分はADHD」だと言ってくる人も少なくありませんが、多くは過剰診断です。神経発達症は恒常的な特性です。診断基準に書いてあることがときおり起きるからといってADHDだと診断してはいけません。そもそも自分で自分の不注意に気づけること自体、注意が欠如していない証拠でもあります(注意欠如症でも「なぜかうまくいかないなあ」と感じることはできます)。

職場で自閉性や注意欠如性を持つ人にどう向き合うか、次報でお伝えします。